
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No. 96

January 2015

2014年度大会が閉幕



(写真は大会一日目共通論題「冷戦とソ連の対外関係」の様子)

【2014年度総会について】

事務局

2014年10月18日現在の会員数は263名（うち休会者9名）となっています。規約第4条では、会員総数の5分の1の出席で総会が成立すると定めており、「休会制度内規」第4項に従って会員数から休会者数を除くと、定足数は51名となります。総会はこの定足数を満たし、開催されました(委任状48通を含む)。冒頭で議長に寺山恭輔氏を選出し、続いて委員長・土屋好古が2013/14年度の活動報告を行ないました。

今年度例会は5回開催され、ニューズレターが4号刊行されました。雑誌『ロシア史研究』は93号が2013年11月、94号が2014年5月に刊行されました。決算報告は会計担当・巽由樹子が行ない、会計幹事の富田武・鈴木健夫両氏による監査報告とあわせて承認を受けました。

また活動方針については、通常の活動に加えて、雑誌『ロシア史研究』の過剰在庫を溶解処分することが承認され、そのための予算を計上した予算案も承認されました。

なお、2015年8月にはICCEESの幕張大会が予定されていますが、ロシア史研究会大会は例年通り10月に開催いたします。本大会での報告は、幕張大会で発表したものを日本語で改めて発表するという形でもかまいません。研究会ホームページでもお知らせいたしますが、各申し込み締め切りは以下のとおりです。奮ってご応募ください。

共通論題提案締め切り 2015年3月8日(日)

自由論題・パネル応募締め切り 2015年5月6日(水)

2013/14年度ロシア史研究会会計報告 (2013. 9. 1～2014. 8. 31)

前年度繰越

ゆうちょ銀行定額貯金	4,000,000	
ゆうちょ銀行普通預金	1,602,098	
ゆうちょ銀行振替口座	2,283,904	
みずほ銀行普通預金	449,260	
現金	102,377	
		計 8,437,639

2013/14年度収支

収入

一般会員会費	1,445,000	*
雑誌会員会費	96,000	
雑誌売上	179,500	
情報システム研究所	149,964	
広告収入	90,000	
ゆうちょ銀行利子	440	
みずほ銀行利子	118	
		計 1,961,022

支出

N.L.関連	319,228	
雑誌印刷・発送	779,690	
名簿関連	130,457	
例会関連	28,114	
会計関連	35,977	
事務局関連	47,464	
各種会費	1,031,080	
大会関連費	143,405	**
		計 2,515,415

**大会関連費 (12/13年度)	-143,405	の赤字	
収入		支出	
非会員参加費	0	アルバイト代	48,000
懇親会費	290,000	食事代	15,000
祝金 (日ソ)	10,000	会場使用料金	94,185
祝金 (ナウカ・ジャパン)	10,000	懇親会費用	296,220
計	310,000	計	453,405

次年度繰越 (2014. 8. 31)

ゆうちょ銀行定額貯金	4,000,000	(現在の利息18,208円)
ゆうちょ銀行普通預金	811,490	
ゆうちょ銀行振替口座	2,076,904	
みずほ銀行普通預金	941,564	
現金	53,288	
		合計 7,883,246

前年度繰越+収入= 支出+次年度繰越=10,398,661

2013/2014年度の収支 ¥554,393 の赤字
(次年度繰越-前年度繰越)

*2013/2014年度分一般会員請求額 ¥1,385,000、納入額 ¥1,160,000 (納入率83.8%)
A会員120名 (¥8000)、うち家族割引1名 (¥4000)、委員割引10名 (¥3000)、休会4名
B会員140名 (¥4000)、うち家族割引4名 (¥2000)、委員割引4名 (¥0)、休会5名

本頁は、一般公開のために編集されました（2018年10月13日）。
会計監査委員による監査の結果、問題ないことが承認されたことが掲載
されています。また、会計監査報告原本は、事務局に保管されていま
す。



（写真は大会一日目自由論題報告「黎明期（1992－99年）のロシア連邦安全保障会議 - 『機能強化』の潜在性の検討 -」の様子）

【ロシア史研究会 2014 年度大会に参加して】

青島陽子

二日目のプログラムを中心に、大会の印象を記したい。

二日目午前中に矢口啓朗の報告「会議外交におけるロシアの役割」を拝聴した。報告の趣旨は、1839～1841年の第二次シリア危機における露英協調の成立を、G.H.Snyderの同盟理論を用いて分析する、というものである。史料は、主要には、高官や皇帝の間で交わされたフランス語の書簡が用いられ、その言説から諸国の利害意識が析出される。興味深いテーマであるが、歴史学の議論とするならば、コメンテーターの池本今日子が指摘したように、「ロシアの野心」（池本）を明らかにする必要があるであろう。ロシア外交におけるウンキヤル・スケレッシ条約の位置づけ、ヨーロッパ協調と東方問題の関連（池本）、黒海へのロシアの眼差し（花田智之）、第二次シリア危機とカフカス戦争との関連（加納格）などに関する質問が相次いだことから、19世紀前半におけるロシア外交戦略の全体像と当事例の関係が明確にされることが期待されるであろう。

矢口報告では、前日の共通論題「冷戦とソ連の対外関係」の議論に引き続き、国際関係において、国家イデオロギーよりも軍事戦略が先行することが強調されていたように感じた。だが吉村貴之が、バルカン半島における正教徒の盟主としてのロシアと、カトリックの盟主としてのフランスの対立を指摘したように、イデオロギーが軍事・外交分野に与える影響については検討が必要であるように思われる。この問題は、イデオロギーの対立が軍事・外交で果たした役割の如何という、前日の議論とも重なる。金成浩と佐々木卓也は地政学的利害が軍事・外交の優先事項であったと示唆したのに対して、藤沢潤はソ連外交において「世界の社会主義者に向けて「演技をする」」ことが重視されたと指摘した。ロシア帝国、ソ連、現代ロシアにおける外交戦略に本質的差異があるかどうかを考える際、イデオロギーと地政学の比重の問題は考察に値するよう思われる。改めて外交史の重要性を考えさせられた報告と共通論題であった。

二日目の午後は、第一次世界大戦開戦百年にちなんだ共通論題「第一次世界大戦とロシア」に参加した。三報告は、コメンテーターの松里公孝の指摘によれば、第一次世界大戦による社会の実態の変容というよりは、第一次世界大戦の



(写真は大会二日目自由論題報告「会議外交におけるロシアの役割」の様子)

パーセプションという近年の動向に沿った報告であった。この戦争認識には社会階層や政治的立場などによって異なる「多様性」が見られた（佐藤正則）が、そのなかでも、石井規衛が皇帝（ニコライ二世）、池田嘉郎がリベラル（カデット）、佐藤正則が宗教的思想家（ニコライ・ベルジャーエフ）に焦点を当てて、それぞれの戦争認識を論じた。

石井報告は、二月革命を革命の推進主体ではなく、ニコライ二世の動向から分析するというものであった。皇帝自身の日記や書簡、高官の回想録が用いられた「ファクト・ファインディング」（松里）な試みであったが、松里は、そうであるからこそ、例えばヴァレンチン・ジャーキンなどの先行研究との差異を明確にすべきではないかと指摘をした。確かに、和田春樹がレイモンド・ピアソンの名に言及したように、革命を帝政の自壊と捉え、ニコライ二世に焦点を当てる研究には先例が少なくない。ドミニク・リーベンやリチャード・ウォートマンらも、エリートとの関係構築に躓いて専制を強化（神聖化）し、民衆との一体化の幻想を抱きつつ戦争に傾倒する「軍・民衆と交流する無視無欲の愛国的指導者」（ウォートマン）というニコライ二世像を描出しているため、そうした先行するニコライ二世論との差異が明確であると理解しやすかった。

あろう。さらに和田春樹からは、皇帝と人民の一体化を分析するには、開戦直後からの皇帝の帝国全域にわたる行幸を評価しなければならないのではないか、との指摘もなされた。また、石井が強調する「無制限専制」=民を束ねる神聖性=超ナショナリズムという構図に対しては、皇帝が警戒するほど社会にナショナルな機運が見られたというのは誇張ではないか（松里）、あるいは、1916年の異族人の徴兵とそれへの反乱はどう考えるのか（河本和子）、などの質問が出された。ナショナル／王朝原理の重なりとズレについては、さらなる研究の進展が期待される点であろう。

池田報告は、カデットのヨーロッパ認識を論じ、カデットがイギリスの政治社会体制や動員体制を範としつつ、皇帝を支えながら、連合国とともに大戦を戦いぬこうとしていたと論じた。池田の議論に対しては、地方に力を持っていたゼムゴルなどではなく、カデットを取り上げる理由は何か（松里、吉田浩）、カデットは一枚岩ではなく世代間の差異があるのではないか（中嶋毅）、など、帝政末期の政治空間におけるカデットの位置づけについての質問が出された。カデットがイギリスを理想化したこと（これは松里が指摘した通り現在は脱構築されつつある神話的言説である）が、彼らがロシアの専制を支えたことや、帝政が崩壊した後のカデットの戸惑いにどう影響を与えたのかなど、興味深い論点が多く含まれていると思われる。

佐藤報告は、宗教指導者のベルジャーエフが、第一次世界大戦をロシアの知的世界の刷新と捉えたことを論じた。フロアからは、池田報告に対してと同様に、ベルジャーエフの言論界における影響力への質問（見目典隆）が出された。また、東西の結合者としてのロシアという言説はロシア史を通じて見られるものだが、第一次世界大戦がその思想にどう影響を与えたかという疑問も提起された（松里、長沼秀幸）。第一次世界大戦期の知識人の言論空間や知的パラダイムのなかで、ベルジャーエフがどう位置付けられるのかが問われるであろうし、また、池田報告や石井報告との関係で言えば、ベルジャーエフ自身が戦争のなかで帝政（皇帝）をどう捉えていたのかにも関心が湧く。

総じてフロアから多数の質問が出され、議論が白熱する意義深いセッションとなった。討論者と司会者の議論もそれに興味深い色合いを添えた。松里は、コメントの冒頭で、第一次世界大戦中の帝政の崩壊について、総力戦はデモクラシー（国民化の程度）によって効率化するとは限らず、各国の戦争負担にはばらつきがあるので、崩壊は必ずしも体制の非効率を意味しない、と述べた。そして、帝政が破綻したのは効率が悪かったからではなく、政府が統制能力を発揮できない程度の動員体制を整えたことにあった、と論じた。それに対して、司会の土屋好古はセッションの最後に、松里の議論に疑問を呈し、ヨーロッパの大戦は基本的には対等国同士の戦争であったため、やはりそれぞれの国家の凝集性（国民化の程度）が試されたとは言えるのではないかと述べた。戦争と動員（国民化）の問題は古典的テーマであり、それぞれのコメントは両者のかねてよりの持論であるが、解決された古い論題ではないことが分かる。討論の継続を期待したい。



（写真は大会二日目共通論題報告「第一次世界大戦とロシア」の様子）

【2014 年度ロシア史研究会大会 参加報告記】

長沼 秀幸

東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻

2014 年度ロシア史研究会大会は、10 月 18、19 の両日に日本大学文理学部にて開催された。筆者が参加したのは、初日の自由論題（井上岳彦報告）と二日目の共通論題「第一次世界大戦とロシア」（池田嘉郎報告、佐藤正則報告、石井規衛報告）である。以下では筆者の個人的な関心により、特に印象に残った井上報告と佐藤報告に関する感想を述べたい。

「菩薩となったツァーリ：ドン・カルムイク人社会から見るロシア帝国」と題した井上報告は、ヴォルガ・カルムイク人と比べると研究蓄積の少ないドン・カルムイク人に着目し、仏教徒であるカルムイク人が、いかにしてロシア帝国に適応したのかという点について論じた。筆者の感想としては、フロアからのコメントにもあったように、そもそも帝国がなぜカルムイク人という仏教徒がカザーク社会に適合すると考えたのかという点に関して強い疑問をもった。より厳密に述べると、仏教徒という切り口のみでカルムイク人をとらえることの妥当性について考えさせられた。カルムイク人をドン・カザーク社会に編入する段階においては、彼らが仏教徒であるからというよりも「軍事的に有用な遊牧民」であるという論理が重視されたからこそ、ドン・カザーク社会という軍事身分集団に適合可能であると帝国が考えたという可能性はないのか。つまり、帝国はカルムイク人に対して、「仏教徒」や「遊牧民」—おそらく他にも存在すると推測されるが—というラベルを貼り、時代や状況に応じていずれかを優先させることによって個々の政策を決定・実行していったと考えることができるのではないかと。井上氏が、「ロシア帝国による「宗派」の設定は、その「宗派」の数だけのロシア皇帝と臣民の結合の物語」があると述べるように、帝国がカルムイク人に付したラベルの数だけの、帝国とカルムイク人の結合の物語もあるはずである。今後は、帝国がドン・カルムイク人に付した様々なラベルを考慮に入れた上での、より多角的な視点からの帝国と現地社会の関係構築に関する研究を期待したい。



（写真は大会一日目自由論題報告「菩薩となったツァーリ：ドン・カルムイク人社会から見るロシア帝国」の様子）

佐藤氏は「ロシア宗教哲学者と世界戦争：ベルジャーエフの場合」というタイトルで、ニコライ・ベルジャーエフという知識人の思想に着目し、彼独自の世界戦争論について論じた。筆者が特に興味を引かれたのが、ベルジャーエフがもった、ロシア文化の「女性性」を強調するオリエンタリズム的な思考様式、およびコメンテーターの松里公孝氏が指摘したような、後の時代におけるユーラシア主義的な思想である。彼のこうした思想的傾向は、前後の時代における思想史との部分的連続性を想起させる。このように考えると、第一次世界大戦という特殊な状況がどれだけベルジャーエフのような思想を形作る上で特別な役割を果たしたのかという点に疑問をもつ。つまり、もともと存在した思想的土壌の上に、彼の思想が萌芽した契機として第一次世界大戦を位置づけることが可能なかどうかという点について、より詳細な議論が必要ではないかという印象を受けた。

以上、筆者の個人的な関心に基づいた報告記であるが、総じてどの報告からも多くの刺激を受けることができ、私のような大学院生にとっては非常に貴重な学びの場となった。全体討論の場

で大学院生の若手にも発言する機会が与えられていることは本学会の良い点であり、次年度以降の大会もこのような「空気」が継承されていくことを期待したい。



(写真は大会二日目パネル「19世紀後半より20世紀初頭における日露間の医療<交流>」の様子)

【ロシア史研究会9月例会レポート】

徳重 豊 (明治大学・院)

長沼秀幸 (東京大学・院) 「19世紀前半におけるオレンブルクのカザフ統治: 内オルダ・カザフとオレンブルク・カザフに対する帝国政策の比較を中心に」

本年度9月20日の例会は、青山学院大学で開催された。報告者である長沼秀幸氏は東京大学大学院人文社会系研究科に所属し、近代のロシア帝国史、特に19世紀におけるロシア帝国のカザフ草原統治を専門としている。同氏による今回の報告は、19世紀前半のオレンブルクにおける2つのカザフ遊牧民集団—内オルダ・カザフとオレンブルク・カザフ—に対する帝国の政策を、情報収集に基づく帝国の現地社会理解と「国境」認識という視角から検討するものであった。以下で述べるように報告においては、「略奪的」だった対オレンブルク・カザフ政策に「不干渉」を基本方針とした对内オルダ・カザフ政策を対置する先行研究の理解に対し、両集団への帝国の対応において通底する政策の特徴として「接触の回避」という新たな視角が提示された。

小ジュズのカザフ集団は1797年にオレンブルク軍務知事により設置されたハン諮問会議と独自のハン制により統治されていたが、1801年にスルタンのブケイがロシア帝国に臣従し、ウラル右岸へ移住を始める。その後『オレンブルク地方統治改革に関するアジア局委員会意見書』により成立した1824年体制により小ジュズはウラル川を境界に内オルダ・カザフとオレンブルク・カザフに行政区画上明確に区分され、その際に後者のハン位は廃止された。

こうして成立した1824年体制下の帝国の対カザフ政策を特徴づける事例として、1829年のカイクアリ・イシモフ逃散事件が挙げられる。同事件は内オルダのハンであるジャンギルがウラル左岸に逃亡を企てたカイクアリをロシア帝国正規軍の協力を得て逮捕したことで終結したが、その際の帝国当局の対応はカイクアリら内オルダ・カザフをウラル右岸に封じ込めることで境界外での騒擾を防止するという発想に基づくものであった。

他方、ウラル左岸のオレンブルク・カザフには区域の導入と『1831年規則』による部・区域制度を支柱とした1824年体制の強化が実施されてゆく。同時に同体制に従順でないカザフ遊牧民は、要塞線上から追放された上で新たな住居・監督者の申告が課せられた。さらに1833~42年のペロフスキー軍務知事下では、治安維持における現地人官吏の任用や反乱鎮圧や遠征へのカザフ遊牧民の動員が行われた。長沼氏はこうした19世紀前半の対オレンブルク・カザフへの政策を、カザフ草原の治安維持機能を担わせる「草原の憲兵」化と評価している。帝国当局はこれらのカザフ遊牧民たちを要塞類を介しての情報収集により掌握しており、要塞線は各部の境界に設置され、異なる部間での接触が起こらないように配慮されていた。このように帝国の2つのカザフ集団への政策は一見したところ異なる性格を有しているが、騒擾を回避するために騒擾の原因となるカザフ集団間の「接触の回避」が志向されていたという点で両集団への政策は共通性を

有していたというのが報告の結論である。

(写真は9月例会「19世紀前半におけるオレンブルクのカザフ統治: 内オルダ・カザフとオレンブルク・カザフに対する帝国政策の比較を中心に」の様子)



本報告はこれまで本邦で含蓄が少なかった19世紀前半のロシア帝国史研究に一石を投じているだけでなく、中央ユーラシア史の研究者にとっても多くの示唆を含むものであり、さらなる研究の深化が期待される。紙面上全てを紹介できないのが残念であるが質疑応答・議論も活発に行われた。中でも『1831年規則』の史的位置づけを巡って、これを旧来の人的結合関係を維持したまま現地住民の規律化を意図したものとする東大の池田氏と区域細分化による現地掌握の志向の表れとする日大の土屋氏の間での議論が印象的であった。

【委員会からのお知らせ】

2014年版名簿に誤りがありましたので、訂正をお願いいたします。

※2018年10月13日、一般公開のためにこの部分は削除編集しました。

【新会員の紹介】

2014年10月～12月の新入会員（3名、入会日順）をお知らせします。

大石 侑香（2014年10月10日入会）

所属：首都大学東京大学院人文科学研究科社会人類学教室

専攻：社会人類学、西シベリア・トナカイ牧畜民の環境利用と土地制度

岡本 和彦（2014年10月10日入会）

所属：東京成徳大学人文学部国際言語文化学科

専攻：国際関係史、コミンフォルム、冷戦期のソ連東欧関係、コミンテルンの諜報活動

鳥山 祐介（2014年10月16日雑誌会員から移行）

所属：千葉大学文学部

専攻：18-19世紀ロシア文学、文化史

【ICCEES 幕張大会について】

*参加費助成について

2015年8月3～8日に幕張で開催されるICCEES幕張大会に関して、ロシア史研究会では、当会の寄付により、下記の条件にあう会員に対する参加費の助成を行います。

- ・常勤職に就いていない方。
- ・ただし、以下の場合のはのぞきます：日本学術振興会よりDC、PDを含む何らかの科学研究費補助金を得ている方、任期付の常勤職に就いている方、2015年4月1日以降に常勤職に就くことが決定している方、定年退職した方。

助成の希望者は、下記のメールアドレスまでご連絡ください。申請書を折り返しお送りいたします。

応募の締め切りは2015年4月30日（必着）といたします。それ以降の応募につきましては、いかなる理由があっても助成対象とはなりませんので、ご注意願います。（青島陽子）

参加費支払方法（銀行振り込み）について

ICCEES幕張大会への参加を希望される方で、パソコン等による参加費の支払いができない方は、以下の銀行口座に直接振り込んでいただくことができます。

三菱東京UFJ銀行 吉祥寺支店
普通預金 0278313
口座名義 ICCEES 世界大会組織委員会 代表 下斗米伸夫

よろしく申し上げます。（池田嘉郎）

ICCEES幕張大会組織委員会へのロシア史研究会代表 池田嘉郎、青島陽子

ロシア史研ニューズレター
第96号 2015年1月5日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
（立石洋子、金山浩司）
〒169-8050
東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学 教育・総合科学学術院
小森宏美研究室気付
